<研究ノート>携行武器から見た秩父事件

河本, 由生 / KAWAMOTO, Yoshio

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

59

(開始ページ / Start Page)

41

(終了ページ / End Page)

57

(発行年 / Year)

2003-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011453>

〈研究ノート〉

携行武器から見た秩父事件

河本 由生

はじめに

秩父事件は、自由民権期におこった事件の中で最も大規模なものであり、多くの研究がなされている。この秩父事件の一八年前に、秩父地方を含む埼玉県西部で武州世直し一揆がおこっている。武州世直し一揆では、「剣類は停止致し、得物ニは野具を携へ⁽¹⁾て出るとか、「得物ハ鎌、鋸、斧等ノ農具ヲ持チ、槍刀一切無用タルヘシ」と言い継ぎ⁽²⁾されており、実際にも武器を携行しないことが遵守されていた。⁽³⁾しかしその一八年後の秩父事件では、「巡查共ハ残ナク片付タゾ、鉄炮、太刀、竹鐮等ヲ持テ、棕神社へ出ヨ、出ザレハ焼払フゾ」と声をかけ狩り出しを行っており、武州世直し一揆で禁止していた槍刀はもとより、鉄砲までもが携行・使用されている。地域的に重複する部分があり、一八年しか経ていないことから、両方に参加した者もいたことが当然考えられるが、武器の側面から見ると、武州世直し一揆と秩父事件との間には大きな相違がある。

携行武器から見た秩父事件（河本）

これまでの武州世直し一揆を含む幕末・維新期の民衆闘争に関する論考では、一揆参加者の武器から考察を深めているもの⁽⁴⁾があり、その流れの中で秩父事件の意義にまで言及するものはある。⁽⁵⁾しかし秩父事件を中心に据えた研究では、どれも何名かの証言をもとに分析したものであり、全参加者の武器の携行・使用から分析考察したものはない。私は、秩父事件と武州世直し一揆を含む幕末・維新期の民衆闘争との相違を考察するためには、秩父事件の全参加者の視点からの分析を行う必要があると考える。

本稿では、秩父事件の携行武器の実態と、幕末から自由民権期までの民衆闘争における携行武器の変遷を明らかにすることを目的とする。そのために、まず秩父事件全参加者の裁判資料より携行武器の分析を行い、次に武州世直し一揆から秩父事件までの携行武器を概観、考察していくことにする。

一 武器の分析

まず初めに、秩父事件参加者の裁判資料から武器携行について

の統計をとると、表1のようになる。

これらの携行物の中で、圧倒的に数が多いのが竹槍である。また竹槍は、裁判言渡書中で「竹槍又ハ棒」のように「又ハ」という表現で表記されることが多いが、「又ハ」と記されている者を含めないと一四二七名、これをすべて加えると二六七六名が携行していることになる。最小数をとると、全有罪者の三七・五％という割合であり、最大数では七〇・四％という割合となる。竹槍が秩父事件での主要携行武器であるといえる。

竹槍に次いで多いのが一七二名ないし三三四名の者が携行している棒である。

その次に多いのは、一七二名ないし一七三名が携行した刀類である。刀類は他の携行武器より携行者数の幅が小さく、この点が大きな特徴である。随行者とみなされた者（罰金刑以下に処された者）には、「竹槍又ハ棒」というように、異なる携行武器を持った者をまとめて裁判言渡書に記していることが多いが、刀類の携行者はそのような扱いは受けておらず、裁判所が刀類の携行を重視していたことを示している。

またこの他に携行数の多い武器をあげると、鉄砲（四八名ないし五八名が携行）、鎌（四〇名ないし一五八名）、木刀（二三名ないし六六名）、棍棒（二三名ないし二〇〇名）、短刀（一三名）、獵銃（九名ないし一四名）、丸棒（七名ないし一七名）、蒿口（四名ないし三五名）、鉞（四名ないし一八名）となる。

1 埼玉県からの参加者

次に各県からの参加者別に、それぞれの特徴を指摘してみる。まず、携行物では、竹槍の割合が四二％から七六・二％である。他県参加者の中で竹槍の割合が最も高い、明治一七年一月四日以前から参加している群馬県出身者の五九％と比較すると、幅はあるものの多いと言える。これは、埼玉県内において参加者の狩り出しがより多く行われた結果であると考えられる。

次に特徴的なのが、刀類の数が多いことである。しかし、これを割合にすると四・一％となる。群馬、長野両県からの参加者は、それぞれ二七・八％、二・三％であり、埼玉県参加者の刀類の割合が突出して大きいとはいえない。

鉄砲は、三七名ないし四四名の者が携行したことが確認できる。全火器類では、五〇名ないし五五名の者が携行しており、事件全体の約七〇％の火器が、埼玉県参加者により携行されていたことになる。同県参加者は、そのほとんどが事件初期から参加していることと、鉄砲携行率の高さから、困民軍が初期段階から火器の重要性を意識していたことを指摘できる。

また、鎌、鉞、蒿口、棒、棍棒も他県参加者より多数携行されている。中でも鎌は、江戸時代には農民の身分的象徴とみなされていた農具のうちの一つであり、蒿口・鉞は一揆の際には打ち壊しに使用されていた。この三点を含む農具・野具は、伝統的な百姓一揆の携行物であると、これまでに指摘されている。伊古田村名主で蘭学医でもある伊古田純道が記録した武州世直し一揆の触書にも、「得物ハ鎌、鋸、斧等ノ農具ヲ持チ」とあり、これがほぼ遵守されており、一八年前の武州世直し一揆においても秩父事

表1 各県からの秩父事件参加者携行武器一覧表

単位:人

	埼玉県	群馬県 4日以前の者	群馬県 5日以降の者	長野県	合計
刀 類	130	9	21~22	12	172~173
小刀	1				1
短刀	4		9		13
山刀	1				1
薙刀	1				1
刀 剣 類	137	9	30~31	12	188~189
鉄砲	37~44	1	5	5~8	48~58
小銃	5			1	6
短銃	3			1	4
木砲	2				2
火縄銃	1				1
獵銃			1	8~13	9~14
拳銃	1				1
火器 類	50~57	1	6	15~23	72~90
竹槍	1314~2381	23	45	45~227	1427~2676
木刀	21~64		2		23~66
槍	1		2		3
手槍	1~12				1~12
鎌	19~58		1	20~99	40~158
鍬	1			1	2
斧				3	3
鋸				2	2
鉞				2~3	2~3
鉈	3~17		1		4~18
農具 類	23~76		2	28~108	58~186
棍棒	13~187			0~13	13~200
丸棒	7~17				7~17
竹棒	3			1	4
麵棒	1				1
天枰	1		1	2	
力棒				0~5	0~5
棒	116~142	2	1	53~189	172~334
鍬の柄	1				1
栗の割木				1	1
割木				1	1
竹の木				1	1
竹	1				1
竹杖	1~3	1		1	3~5
薪杖	0~5			2	2~7
杖	2		1		3
棒 類	146~363	3	2	61~215	212~583
烟火筒	1				1
熊手	0~7				0~7
鉄杖	0~12				0~12
鉄策				1	1
鉄棒				1	1
鷹口	0~22			4~13	4~35
徒手・素手	76~246		6	21~29	103~281
武器の記載なし		4		193	197
合計	3,126名	39名	105名	533名	3803名

*無罪、判決記載なしの者は除いている。

*武器携行者数に幅がある部分は、裁判史料から割り出せる携行者数の最小数と最大数の幅を示している。

*刀類には刀、脇差、長脇差が含まれる。

出典『秩父事件史料集成』一~三巻。

件で携行された鎌、鉈、蒿口、棒が携行され、打ち壊して使用されたことが確認されている⁽¹⁰⁾。

2 群馬県からの参加者

群馬県参加者については、参加に至った経緯の違いから参加日・地域が異なるため、これを二つに分類する。まず第一に事件前より参加の勧誘を受け、事件当初より参加した者たち、第二に四日の困民軍本陣解体後に困民軍の一部が長野県へ転戦する途中で、山中谷と呼ばれる神流川流域の村々から狩り出しを受けて参加した者たちである。

しかし、両方の有罪参加者の携行武器をみると、共通した特徴が読みとれる。

まず刀類を携行した者の割合が共に二〇%台後半であり、それぞれ四・一%・二・三%という埼玉、長野両県よりも多い点である。次に農具類、棒類の数が右の両県と比べて圧倒的に少ない点である。

以上の二点は、呼びかけられて、竹槍、刀、鉄砲以外の携行物を持って参加した消極的な随行者が少ないことを示している。

これは以下の事情が影響していると考えられる。事件当初より参加した者は、秩父での狩り出し時とは違い、武器を振りかざしての狩り出しを受けていないということ。一方困民軍が神流川流域の村々に到達した頃には、困民軍の人数も減少しており、自警団を編成した村もあった。中でも魚尾村は一月六日に困民軍を撃退してすらい。これらの事情から、秩父でのような狩り出し

の状況は僅少であり、わずかに宿陣した神ヶ原村で五日に、楢原、乙父両村で七日未明にそれぞれ行われたのみであった。

3 長野県からの参加者

長野県からの参加者の特徴は、鎌、棒、蒿口がそれぞれの最低数をとっても二〇、五三、四という数で存在する点である。埼玉県においても、鎌一九、棒一一六が最低数存在し、蒿口においてという少数しか携行されておらず、蒿口は携行されてすらい。この点から、竹槍、刀、鉄砲以外の携行物を持つ者が多数存在するという埼玉県と長野県には、近似性があると指摘できる。

火器類の割合が、五日以降の群馬県参加者と同様に多いのも特徴である。またこの中で、埼玉県参加者には見られない猟銃という記述があるが、これは農民たちが裁かれた裁判所が異なるため、その記述のしかたも異なっているという事情が要因であろう。

困民軍は山中谷で獲得できなかった、鎌、棒、蒿口を手取る参加者を、長野県に入ると獲得できた。ここに「相木村へ到レバ自由ノ党派ガアリテ、又人ヲ募ル事モ出来候故、其レヨリ甲州へ入りテ何レカスベシ」と語っているように困民軍の再生を考え、山中谷の中、困民軍を率いてきた菊池貫平の願いの第一段階は成功したと考えてよい。しかし、棒、農具の鎌という竹槍より武器的性格の低い物を手取る人々が増えたことは、銃の徴発に心を砕いてはいても、結局鎮台兵、警官隊の前に壊滅せざるを得な

かった原因として考えることができる。

4 日ごとの携行武器の数

次に別の視点から武器の分析を行ってみたい。

表2は、それぞれの日ごとに携行された武器をまとめた表である。ここからその特徴をいくつか指摘してみたい。

最初に参加者数の推移であるが、二日にかけて大幅にその数を伸ばし、三日も微増している。しかし、本陣が崩壊する四日になるとその数が激減する。

同様のことが、それぞれの日からの参加者数の動向にも当てはまる。それぞれの日からの参加者数は、三一日夕刻から一日にかけての九〇二名、二日の一二七六名、三日の八三三名であるのに対し、四日からの参加者は一四六名という少数になっている。

これは四日になって本陣が崩壊し、大宮郷周辺で自警団が組織されると、困民軍による大規模な狩り出しが少なくなったことを示している。

この減少傾向は、転戦し群馬県の神流川沿いを遡上している間も続く。五日からの参加者が二三名、六日が四五名、七日が一七名である。参加者数が増加に転じるのは長野県に入る八日以降であり、八日からは一四五名、九日からは三七六名が参加している。

この参加者数と同じ動きを示す携行武器が、竹槍と棒である。この点と、携行者数の第一、二位であることを併せて考えると、竹槍だけではなく棒も秩父事件の参加者の代表的な携行物である

と言える。

竹槍、棒については、持参者も多いが、困民軍が配布している場合もある。

貴船神社の神官であり事件の詳細な記録を残している田中千弥は、困民党伝令使の坂本宗作ら数名が、一日に齋藤利平方にて、「刀四振、脇差六腰、バラ棒一本、ヨリ棒一本ヲ掠奪」したと記録している。彼らは「今般自由党ノ者共、総理板垣公ノ命令ヲ受ケ天下ノ政事ヲ直シ、人民ヲ自由ナラシメント欲シ、諸民ノ為ニ兵ヲ起ス、味方追々増加シテ頗兵器ニ乏シ、依テ刀劍、槍、銃等借用セタメ来レリ」と武器を借りる理由を語っているが、実際には「バラ棒」「ヨリ棒」という棒類も略奪している。これは、棒をも困民軍幹部が武器とみなして強制徴収し、配布していたことを示している。

次に、竹槍についてみると、二日の長留村においての狩り出しの際に、困民軍の狩り出し担当者が竹槍を製造し、八〇名ほどにそれぞれ手渡しして困民軍の駐留する大宮郷へ向かわせている¹³⁾。

以上のことから、困民党幹部たちも参加者の携行武器として竹槍、棒を考えていたことがわかる。

竹槍にのみ注目すると、群馬県に入る五日から七日において、「竹槍又ハ」という記載のある裁判言渡書を持つ参加者は存在しないという事実がある。しかし、この傾向は、長野県に入る八、九日になると変化し、また「竹槍又ハ」というような記載のある裁判言渡書を持つ参加者が出てくる。

表2 日ごとの秩父事件参加者携行武器一覧表

単位:人

	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日
刀類	62	94	105	86	45	42	37	26	23
小刀	1								
短刀	3	3	2	2	4	7	9	4	4
山刀	1	1	1	1					
薙刀	1	1	1	1	1	1	1	1	1
刀剣類	68	99	109	90	50	50	47	31	28
鉄砲	16	28-35	27-38	23	18	14	13	10	14-17
小銃	4	4	5	4					
短銃	2	2	3	3	3	2	2	3	2
木砲					2				
火縄銃									
猟銃							1	2	7-12
拳銃	1	1	1						
火器類	23	35~42	36~47	33	21	16	16	15	35~42
竹槍	333~ 700	928~ 1753	865~ 1585	321~ 454	71	74	60	37~42	77~258
木刀	8~25	15~58	10~53	5	3	2	2	1	1
槍		1	1	1		2	2	2	5
手槍			1~12						
鎌	12~23	17~40	15~42	2~10				1	19~98
鍬	1	1	1	1					1
斧							1		3
鋸								2	
鉞	1							3	
鉈		2~16	2	1	1	1	2	2	2
農具類	14~25	20~57	18~45	4~12	1	1	3	8	25~102
棍棒	8~13	10~114	1~148	1~22	1	1	1	1	0~13
丸棒	6~16	1							
竹棒		2	1						1
麵棒		1	1						
天秤			1						1
力棒									0~5
棒	17~303	57~639	63~458	47~123	5	2	2	18~24	42~174
鍬の柄	1	1							
栗の割木									1
割木									1
竹の木		1							1
竹									
竹杖	1	3~5	2						1
薪		0~5							
杖		2	1						
棒類	27~318	83~786	71~613	48~145	6	3	3	20~26	49~199
烟火筒			1	1					
熊手		0~7							
鉄杖		0~12							
鉄策									1
鉄棒		0~12							
藪口	0~22	0~22	0~22						
徒手・素手	2~61	1~42	66~159	48~76	3	6		17	20~28
武器の記載なし	34	51	267	65	21	20	15	100	116
参加者数	860	2011	2109	713	150	145	131	203	532

* 無罪、判決記載なしの者は除いている。

* 武器携行者数に幅がある部分は、裁判史料から割り出せる携行者数の最小数と最大数の幅を示している。

* 刀類には刀、脇差、長脇差が含まれる。

出典『秩父事件史料集成』一～三巻。

これは、埼玉、長野両県のみならず複数の武器所持者をひとくくりにした裁判言渡書を持つ参加者が存在するということであり、両県における大規模な狩り出しの存在と、群馬県における狩り出しによる参加者の少なさを示している。

一方、数の幅が参加者総数の幅よりも少ないのは、刀類、鉄砲である。これは中心となる参加者が持参していたものが刀類、鉄砲であり、彼らの数の幅が少ないということを示している。

しかし、火器類が九日に増加に転じるのに対して、刀類は増加していないことも注目値する。またこれまでには携行されていなかった鋸や鉞、七日に一本のみが携行されていた斧が、長野県に入ると数個ずつ携行されている。これは長野県に入って、武力闘争よりも打ち壊し主体の運動の性格が強くなったことを示している。

以上、裁判資料の分析から、秩父事件では竹槍のみならず、刀剣類、火器類、農具類、棒類などの多様な武器が携行されていたこと、狩り出しによる参加者が多いという埼玉、長野両県の共通の特徴が見て取れた。また、日ごとの携行武器の数の動向からは、秩父において四日に一旦分裂、弱体化した困民軍が、長野県で再生する様子が見て取れるが、刀類の減少傾向の持続やそれまでにない種類の打ち壊し道具の出現から、困民軍が武力闘争的性質を弱めていることも読み取れた。

5 部隊編成

次にこれらの武器は困民軍の中で、どのように配置されていた

携行武器から見た秩父事件（河本）

のかをみていく。

まず初めに、事件中探偵掛として秩父地方を探索した警部の鎌田冲太が、事件後に著した「秩父暴動実記」からみていきたい。

鎌田は著述の中で、部隊編成について触れており、三日の困民軍は「織平、管平ノ二隊カ大宮郷出発ノ時毎隊約千人中ニ銃手五十人抜刀隊百人ヲ配布」したといひ、「皆野捕虜曰ク、三日ノ晩景皆野ノ総員ハ二千余人アリタレトモ猟銃隊ハ百人ニ満タス、刀槍隊モ又二百人ニ足ラス」といふ捕虜の証言と、「三日ノ戦ニ皆野ノ銃手五十人ヲ指揮セリ」といふ困民軍に参加していた第一五連隊の予備兵卒大河原三代吉の証言をあげている。

では事件参加者たちは、裁判の過程の中でどのように証言しているか、三人の訊問調書からみてみたい。

埼玉県阿熊村と上日野沢村を所管する小隊長の村竹茂市は、自分の部隊の編成を「竹槍組ハ四〇人、鉄砲四挺、十名余ハ抜刀組ニ編入シ三列ニ備エヲナシ」ていたと証言している。

初日から参加している群馬県下日野村の新井品蔵は、二日午後二時頃、大宮郷裁判所、警察署、郡役所に討ち入った際の部隊の構成を「第一ニ鉄砲隊二、三百人、次ニ抜刀隊二百人、第參竹槍隊五、六百人」であったと証言している。

総理田代栄助と同様に代言人であり、蜂起後も田代の側にあつた木戸為三は、最盛時三千人の中に鉄砲を携えていたのは何人かと訊問され、「三千人トシテ、鉄砲ヲ携ヘ居リシモノハ凡ソ二百人位ニシテ、其他ハ抜刀隊ト竹槍組ニ御坐候」と答えている。

以上の証言をまとめたものが表3である。裁判資料から割り出

表 3

	竹 槍	刀	鉄 砲	総人数	備 考
鎌田の著述	1700	200	100	2000	11/ 3
村竹茂市証言	40	10	4	54	自らの小隊
新井品蔵証言	500~600	200	200~300	900~1100	2 日の裁判所等 討入り時
木戸為三証言			200	3000	最盛時の人数
表2の3日の数	865~1585	105	27~38	2109	

した数よりも多くの人数が、それぞれ証言されていることがわかる。

これらの中で鎌田の著述、新井品蔵、木戸為三の各証言にある数は、千人以上の人数を分類せねばならず、概数を述べていると考える。一方、村竹茂市の証言した数は、自村出身者で構成する自らの小隊であり、証言された中では規模が最小であり、容易に数えることが可能な人数である。規模の面から考えると、村竹の証言の数字が最も信頼性がある。

また各証言の人数と、表2の中で参加人数が最大規模となる三日の人数を比較すると、鎌田の著述における銃手、抜刀隊の人数は、裁判資料から数えた人数のそれぞれ約三倍、二倍となっている。また木戸の証言においても、

鉄砲携行者は二倍の人数となっている。新井品蔵の証言にいたっては、刀携行者は約四倍、鉄砲携行者は約一五倍にも達している。

以上の各証言における人数の相違から、以下の事柄が推測できる。

困民軍の携行武器の数の割合は、一日の早い時点では、村竹茂市の率いた小隊のように、竹槍一に対して刀四分の一、鉄砲一分の一というものであった。どこで戦闘が起こるかわからない点、狩り出しの際に相手を威圧する必要、随行者の逃亡防止等の点から考えて、刀、鉄砲は必要不可欠であり、各小隊にも村竹の小隊と同様に配置されていたと考える。村竹の小隊の割合で参加者が最大となる三日の約二〇〇人だとすると、刀類は約四〇〇、鉄砲は約一六〇とならなければならない。事件初日から参加している新井品蔵、木戸為三の証言において刀、鉄砲の数が多く語られているのは、この比率が念頭にあるからではなからうか。しかし、狩り出しを何度もかけていくうちに参加者が増加し、彼らが携行した竹槍の割合も増加して、表2のような数になっていったと考えられる。

また、「自分ハ竹鎗隊ニテ、鉄砲カ先手トナリ前後嚴重ニ取巻カレ居候故逃¹⁸⁾られなかつたという下吉田村の坂本源治郎という随行者の証言から、実際に鉄砲が随行者の逃亡防止に重要な役割をはたしていたことがわかる。

次に、武器の数ではなく武器の種類に注目してみたい。証言中の部隊の編成は、みな「刀、鉄砲、竹槍」となっており、表2に

あるような棒類、農具類、薫口などは述べられていない。これは「刀、鉄砲、竹槍」が困民党幹部達の考えていた主要な武器であることを示していると考えられる。

しかし、一七二以上という棒の数は、竹槍に次ぐ携行数であり、幹部による配布まであることから、棒も参加者の主要携行武器といえる。この点を訊問した警察が目していれば、訊問調査では「刀、鉄砲、竹槍、棒」となるはずであるが、攻撃性の低い「棒」は除かれ、「刀、鉄砲、竹槍」という表現で参加者たちに訊問され、調査が作成されている。しかし、判決文では、略奪が重視され、たとえ竹槍、棒のみであっても重禁錮という重罰に処せられた携行者がいる一方、同じ携行武器で、鎮台兵と交戦を行っていたながら罰金刑で済まされている者もいる。⁽¹⁹⁾ここから、裁判所は交戦の有無ではなく、略奪を重視しており、後に広まる金品の強盗を行った「暴徒」という秩父事件の参加者への捉え方の下地が見られる。しかし、警察の訊問の段階では、攻撃性の高い「刀、鉄砲、竹槍」が重視されており、秩父事件を戦闘とみなしていたと指摘できる。

一方、農具類、薫口などは、狩り出しの際に困民軍が要求した携行武器に入っておらず、参加者の意志で携行了したものであると考えられる。

困民党幹部達は、事件参加に際して彼らの念頭にあった刀、鉄砲、竹槍という殺傷性の高い武器の携行を命じた。ここに、殺傷を厳しく禁じていた世直し一揆との違いが明確に表われている。しかし、農民達の中にはそれ以外のものを持ち出した者もいた。

携行武器から見た秩父事件（河本）

持ち出した農具類、薫口は、世直し一揆において持ち出された代表的な得物である。ここから農民達の中には世直し一揆につらなる意識がまだ残っているとみえる。このような幹部と参加者の間の武器の認識の違いに、秩父事件の性質、つまり一揆の伝統を引き継いでいる性質と、権力に対する攻撃性の強い近世にはない性質が混在するという、複合的性質が見て取れる。また、警察が権力との対決的性質を重視していたことも、訊問調査から読み取ることができた。

二 武州一揆からの武器の使われ方

次に、幕末の世直し一揆から秩父事件までの民衆闘争における武器の変遷を、秩父周辺地域を中心にみていきたい。

まず武州世直し一揆では、武器の携行は禁止され、農具や打ち壊し用の得物が携行されていたことは、これまで確認したとおりである。以下、年代順に寄居寄場騒動、黒田村旗本殺害事件、下吉田組合の騒動、小鹿野周辺の騒動、コレラ予防反対一揆を取り上げる。

1 寄居寄場騒動

武州世直し一揆の二年后、慶応四年二月に、農兵取立反対をきっかけとしておこったのが寄居寄場騒動である。この騒動は同年一月に岩鼻代官所により計画された農兵取立てへの反発をきっかけにして、農民たちが組合村役人の不正を追及する事態に及んだ。騒動鎮静化のために岩鼻代官所より川崎三郎他二名が派遣さ

れたが、逆に農民に追われ、川崎は正龍寺に逃げ込み、それを農民たちは「三拾七ヶ村一同鉄砲・竹鑓・木太刀其外得物ヲ携追掛」ていき、寺を取り巻いて、川崎を捕虜にした。

また、組合村大総代今井九兵衛が逃亡したため、その弟を「表庭へ引倒し打擲いたし候へ共、余り大勢故槍を返す透間無く鑓之鑓ニて突手疵負せ」てもいる。⁽²⁰⁾

この後、組合村役人については、組合村役人による組合村入用の不正を認めさせた上で、その「凡見積り金三百両」を返すこと、今井九兵衛を「剃髪いたし役義永代退役」にして今後「組合村三拾七ヶ村立入」を禁ずること、「其外寄場役人一同退任」すること、という詫書を書かせて事態は収拾された。ところがここへ鎮庄のために岩鼻代官所より歩兵隊が到着する。この歩兵隊は「重役数拾人甲冑ヲ着し、其外上州辺并本庄・深谷・熊ヶ谷辺之道案内其外剣術遣ひ、或は名前も無之無宿同躰之者へ鑓、鉄砲其外得物等を為持、四、五百人計り尤此辺之無宿同躰之者も入交」っているというものであった。しかし歩兵隊は、すでに詫書が出されて騒動は収拾されているので、「空敷掃陣」した。⁽²¹⁾

この騒動において確認される携行武器は、農民側の鉄砲、竹槍、木太刀、鑓、歩兵隊側の槍、鉄砲、刀である。農民・岩鼻歩兵の衝突はおこらなかったが、詫書が出されていなければ双方の携行武器に含まれる鉄砲は使用されていた可能性が高い。少なくとも、武州世直し一揆鎮庄の際に鉄砲を使用している封建権力側は、ここでも使用する目的で鉄砲を持たせたのであろうし、無宿人以外に剣術遣いをも同行させていることから、携行武器が示

威的なものではないといえる。また農民側においても、農具類ではなく、鉄砲、竹槍、木太刀といった武器が携行されている。これはそれまでの一揆とは大きく異なり、明確に封建権力と敵対する姿勢を民衆がとっているといえる。

2 黒田村旗本殺害事件

この事件の概要は以下の通りである。慶応四年三月二七日に、世情不安の中、少しでも収入の確保をと考え、御用金徴収のために自ら黒田村に來た旗本神谷勝十郎が、彼を追い返そうとした農民に立腹し刀で切りかけた。そこで農民達は、「竹鑓亦是蕪口、六尺棒等ヲ以勝十郎様ヲ半殺ニいたし、首を繩ニて縛り地先川原へ引参り焼殺」してしまったのである。⁽²²⁾

この事件では、竹槍、蕪口、棒の携行が確認できる。

3 下吉田組合の騒動

慶応四年二月から、秩父郡下吉田組合でも騒動がおこった。この騒動は組合村大惣代徳兵衛の不正追及に端を発したが、徳兵衛が不正追及に居直るといふ事態になった。この時に、「当月三十日夜明のか称をあいづニ徳兵衛たくへ、うち込趣にさだまり、それに付御村方鉄砲持主、王藁之義じさん致し、下吉田村源八郎門ニ而出合たく」といふ廻文が農民達に回っている。また不正追及と同時期におこった、融通金借用の要求を掲げている質屋、物持ちへの強談では、「当月十九日夜合づ、鉄砲、竹ほら吹立候ハハ村々一人も不残罷出可者也。」という廻文が出ている。

融通金借用交渉においては、鉄砲が竹法螺と併記されており、ここでの鉄砲は一揆の伝統的な鳴り物としての側面が強い。しかし徳兵衛宅打ち込みにおいては異なる状況であった。徳兵衛ら村の重立ちの者は、岩鼻農兵取立て失敗後から、村方騒動防止のため「見廻りと名附⁽²⁵⁾、御武家様方同様之身風俗仕押歩行、農人或ハ往来之人馬を悉威弮⁽²⁶⁾」といったように武装し威圧行為を行っていた。鉄砲持参催促の文句が、こうした徳兵衛宅への打ち込みを促す廻文中にあることから、鉄砲を単なる鳴り物に限定したものが疑問が生じる。威嚇もしくは相手に向けての発砲を目的としたものと考えるのが妥当であろう。

4 小鹿野周辺の騒動

また、同時期に吉田の隣町でもある小鹿野でも、融通金借用、施金を要求する騒動が起こり、三月一三日に小鹿野で、一九日に薄村上郷で、二〇日には小森村で、二三、二九日に薄村でそれぞれ融通、施金が実施されている。その中で携行武器が判明するのは二三日の騒動であり、「廿三日、葉師堂組騒立大平戸是二向テ竹槍、鉄砲掛合扱ニテスミ右融通⁽²⁶⁾。」という事態がおこった。ここで携行が確認できるのは竹槍・鉄砲であり、農民たちは、農民ではなく武器を携え掛合ったことになる。

5 コレラ予防反対一揆

明治一〇年には埼玉県東部の、中尾村と東本郷村、赤山村（現在のさいたま市、川口市）周辺では、県当局のコレラ罹病者隔離

のための避病院の廃止などを要求して民衆が蜂起した。ここでは、民衆は手に蒿口、竹槍、手槍を持ち、「一等巡查田代常太郎外一人と思ふ者二名に出逢たる故、鎗をひらめかし取囲めと自分の指揮に応じ、多人数にて取囲み鎗、竹槍、万能等の得物を差し向け」たという、「蒿口」を携えた頭取の一人長嶋岩松の証言のような事態も起こった。ここでは巡查とみられた人物は人違いであったが、他所においては「兇器を携え巡查を殴打、終に土蔵へ押入れ」という事態にもなった。この一揆で史料から確認できる携行武器は、鎗、竹槍、万能、蒿口である。

次に、以上の民衆闘争において携行された鉄砲、竹槍、農具類について、それぞれみていきたい。

6 鉄砲について

携行が確認できるのは寄居寄場騒動、下吉田組合の騒動、小鹿野周辺の騒動のみであり、黒田村旗本殺害事件、コレラ予防反対一揆ではその携行は確認できない。下吉田組合の騒動における融通金借用の強談では、竹法螺と併記されており鳴り物としての性質が強いが、他は鳴り物に限定した携行とはみなせない。また、寄居寄場騒動においては出動した岩鼻歩兵も鉄砲を携行していた事実を確認した。

年代的に見ると鉄砲携行は慶応四年二月から三月に集中している。また、闘争対象は組合役人、村役人、質屋、物持ちであるが、寄居寄場騒動でみたように、その背後に封建権力が存在すると封建権力も対象に含まれる。これには当時の政治情勢も影響を

与えている。同年二月一二日には徳川慶喜が寛永寺に入り恭順の意を示す一方、三月八日には新政府の東山道軍が高崎に到着し、一〇日には岩鼻代官所官吏が逃走し、代官所が東山道軍に接收された。このように二月から三月にかけてが徳川幕府から新政府への権力交代期であり、このことが大きく影響している。しかし、二年前まで槍刀すら禁止してきた民衆が、鳴り物以外を目的とした鉄砲の携行に踏み切った理由はこれだけであろうか。

これまでの研究により、江戸時代の百姓一揆における鉄砲の使用目的については、合図用の鳴り物としてはあったが、武器としては農民、領主双方に不使用の原則が存在したことが明らかにされている。しかし、安藤優一郎氏は、慶応二年の武州世直し一揆の際には、一揆勢が非武装であると把握されていたにもかかわらず、藩・幕府共に鉄砲までも使用して殺傷しており、対する一揆勢も防戦のために鉄砲を使用するという事態がわずかであるが出現したとして、この原則が崩れていることを指摘している²⁸。

武州世直し一揆においては一揆勢が厳格な武器不使用原則を貫いていながら、封建権力側から鉄砲を含む武器をもって攻撃され、鎮圧された。このことが同年の各地域における闘争において、民衆が鉄砲をはじめとする武器を持ちだした要因であると考える。

7 竹槍について

次に、この期間の騒動すべてにおいて携行が確認される竹槍に注目してみたい。

保坂智氏は、江戸時代および明治初年の竹槍を分析し、第一に江戸時代の竹槍は、「竹鍬、鍬、鋤等を持」と表現されることが多く、竹槍は多くの得物の一つであって、防衛的な性格を持つものであり、竹槍を積極的な武器として使用するという姿勢は見られないこと、第二に、一方、明治初年の一揆となると、「竹槍が一揆の基本的な得物とな」り、「武器＝凶器」として竹槍が持ち出されていることを指摘している²⁹。

これをふまえて武州世直し一揆以降の民衆闘争をみると、慶応二年の武州世直し一揆においては「得物ハ鎌、鋸、斧等ノ農具ヲ持チ、槍刀一切無用タルヘシ」という言い継ぎがされ、それがほぼ遵守されているものの、その後の民衆闘争では、全ての闘争で竹槍が携行されている。年代的には慶応四年から明治一〇年という幅があるが、保坂氏が説く「明治初年の一揆」における竹槍と同様に、武器としての性格がここでも当てはまるであろう。

8 その他の携行武器

最後に鉄砲・竹槍以外の携行物についてみてみたい。寄居寄場騒動では木太刀、鍬、黒田村旗本殺害事件では鷹口、棒、コレラ予防反対一揆では鷹口、鎗、万能の携行が確認できた。

木太刀、鎗（鍬）については、武器とみなせるが、それ以外は江戸時代の一揆によく見られる伝統的な農具又は打ち壊し用道具である。しかしその使用状況に注目すると、黒田村では旗本殺害の目的で携行し、対コレラ予防反対一揆の万能は、「万能を以て四等巡查牧殿の脊及び面部を打殿」というように百姓一揆には

なかった対人攻撃に使用されている。武州世直し一揆の際に携行された農具類、打ち壊し道具の使用については、江戸時代の百姓一揆が持つ非殺傷の思想が内在していると言えるが、それ以降の闘争の武器使用には、それまでの非殺傷の思想が希薄化しているか、もしくは消滅していると指摘できる。

三 秩父事件の携行武器の特徴

秩父事件では、史料が多数現存していることもあり、様々な携行武器が確認された。その中で一番多い竹槍は、武器として持ち出された明治初期の代表的な得物であることを確認した。秩父事件においても、高利貸業者への強談、打ち壊しのみならず、明治初期の一揆と同様に公権力との対決をも辞さない意識を持っていたことが、竹槍の大量携行から見てとれる。

また、武器である刀剣類の大量携行からも、対決姿勢を見てとれる。しかし、鎌などの農具類や鳶口なども持ち出されていた。困民軍幹部達は、警官隊、軍との交戦に耐え得る、より攻撃性の強い刀、竹槍などを配布しているにもかかわらず、農具類、鳶口の携行が数日間継続している。ここから、伝統的な一揆の意識が参加者の中に、形式的とはいえ依然として流れていることがわかる。鉄砲であるが、これは鳴り物として江戸時代から一揆の際に使用され、秩父においても、下吉田組合の騒動で、竹法螺と共に鳴り物として使用されていた。

しかし秩父事件での使用状況をみると、三日に親鼻の渡しで警

官隊、憲兵隊と、四日に金屋で鎮台兵とそれぞれ戦闘し、大量に使用されている。秩父事件は、大量の鉄砲を使った民衆と公権力の希有の戦闘であると指摘できる。

次に、鉄砲を戦闘で使った者の証言から、彼らの心性を探ってみたい。幹部であった島崎嘉四郎の弟の弥十郎は、一月四日に秩父郡石間村横道において群馬県警官隊を襲撃した際に柱野警部補に向けて発砲しているが、尋問の中で「殺す積リテ打ツタ」と証言している⁽³²⁾。これは事件後の厳しい訊問の中の証言であるが、被弾した警部補は、その後、弥十郎の刀を受け取った者により首を切られていることから、証言通り最初から殺すつもりで撃つたと判断できる。秩父事件では各所で鉄砲を使用した戦闘が行われており、このような意識をもって挑んでいた鉄砲携行者が多数存在したと言えるであろう。

では、それまでの民衆闘争の中での鉄砲使用と違う点はどこであろうか。それは、運用面における組織性の高さであると私は考える。

まず、火縄については、一日の夜から三日の晩まで、副総理の加藤織平は石間村近辺の火縄製造経験者に指示して火縄を専門に製造させている⁽³²⁾。弾丸については、二日に大宮郷で、原料となる鉛が二軒より合計六貫目調達されており、弾丸を大量製造していたことがうかがわれる⁽³³⁾。さらに、出先で漁師が所持する投網の鉛から弾を製造することも行われている⁽³⁴⁾。火薬は大宮郷に入った後、蒔田村の逸見福二郎と白久村の坂本伊三郎らが、それぞれ総理の田代栄助より金八円、一五円を渡され、十数人、数十

人を引き連れて、逸見は五貫五百匁、坂本は一五四分の火薬を購入した。³⁵⁾ またこれらの弾薬を運搬していた者が裁判資料から判明するだけで七名³⁶⁾いる。

以上のことから、鉄砲が江戸時代の百姓一揆でのような鳴り物としてでなく、武器として組織的に準備・使用されていたと指摘できる。

また高利貸への談判、警察への説諭願が不調に終わり、慶応四年の諸闘争と同様に、武装闘争にしか活路が見出せない困民党は、政府による武力弾圧は当然予想される³⁷⁾ところであり、鉄砲の大量動員は重要であったと考えられる。このため、当初の攻撃対象が高利貸しであったにもかかわらず、事件以前に刀、鉄砲といった武器を強盗してまで準備している。さらに、この事実から、高利貸しを法的に擁護している官憲との衝突をも計画段階から想定していたと考えられる。

また秩父事件とそれ以前の民衆闘争の相違点として、刀、鉄砲が竹槍とあわせて各部隊に配置されていたことをあげることができ、これこそ秩父事件の発展性を示す点であるといえる。秩父事件では竹槍、棒、刀、鉄砲という狩り出しの際に呼びかけられた武器のみではなく、それ以外の農具などの得物が持ち出されたことも事実である。しかし、火縄が専門者によって製造されたり、竹槍、刀、鉄砲が各小隊内、さらには甲、乙、丙の各大隊に配置されたりしている。秩父事件全体を通してみると、殺傷目的の武器携行において計画性、組織性が意識されていたといえる。

以上のことから期待感の裏切り、恐怖感から、明治政府の施策

に反対するというコレラ予防反対一揆などの新政反対一揆とは違い、秩父事件には明確に明治政府の警察、軍と敵対し、勝利しようという意志が見出せるといえる。

おわりに

以上、秩父事件における携行武器の分析を行ってきた。秩父事件では竹槍、刀、鉄砲のみならず、棒類や、打ち壊しに使用する蒿口、百姓一揆で使用されていた百姓身分を示す農具類、という多種類の携行武器があった。

武州世直し一揆から秩父事件までの武器では、明治初年の一揆で殺傷性の高い竹槍が中心になることに特徴があり、秩父事件においてもこの流れがあることを確認した。しかし秩父事件がそれ以前の一揆、民衆闘争と異なる点は、各部隊への竹槍、刀、鉄砲の配置、事前の強盗による武器調達、火縄製造の専門者や弾薬運搬の存在など、それまでの一揆、民衆闘争より計画性、組織性において秀でていた点にあった。これらのことから、秩父事件は民衆と明治政府の戦いであったといえる。それまでの闘争よりも権力と徹底的に戦う姿勢が見られるということは、困民党独自に事件後の展望を持っていたからであるとはいえないであろうか。

なお、本稿では埼玉県の、特に秩父近辺の一揆、民衆闘争のみを取り扱ってきた。他の地域、特に群馬、長野両県での民衆の動きはどうであったのかという点については今後の課題としたい。また、本稿では事件参加者の証言からの分析を主とせず、携行武器からの分析を主とした。さらに多くの参加者の証言と合わせて

分析するという点も今後の課題としたい。

註

- (1) 近世村落史研究会編『武州世直し一揆史料』（慶友社、一九七一年）第一巻、一六二頁。なお、本稿において史料を引用する場合には、旧漢字を現在の漢字に改め、適宜句読点を付し、異体字は正字に改めた。
- (2) 同右、一七三頁。
- (3) 齋藤洋一「世直し一揆の考察―一揆勢の武器使用をめぐって―」（『响沫集』一、同集発行世話人、一九七七年所収）、同「武州世直し一揆のいでたちと得物」（学習院大学史料館『学習院大学史料館紀要』第一号、一九八三年所収）を参照。
- (4) 井上幸治・色川大吉・山田昭次編『秩父事件史料集成』（二玄社、一九八四年）第六巻、八五頁。以下、出典として同書を記す場合には、巻数と頁数のみを記し、例えば、第六巻の八五頁の場合には、六一八五と略記することとする。
- (5) 勝侯鎮男『一揆』（岩波書店、一九八二年）、藪田貫「百姓一揆と『得物』」（『橘女子大学研究紀要』一四、一九八七年所収）、保坂智「竹槍と旗について―高崎五万回騷動を中心に―」（落合延孝編『維新変革と民衆』吉川弘文館、二〇〇〇年所収）、内田満「旗本神谷勝十郎殺害一揆―得物から竹槍へ―」（『埼玉県立桶川高校研究紀要』四、一九

八九年所収）。

- (6) 松田之利「維新反対一揆」（『一揆2一揆の歴史』東京大学出版会、一九八一年所収）三四六頁。
- (7) 高島千代氏は武器の使用対象の分析の中で、「武器の携行が「債主承諾セサルトキノ威」「官ヨリ手配モアラハ竹槍ヲ以テ手向スル」等のためとしている事例が見られる。彼らが武器を行使しようとしたのは、示談に応じない債主と蜂起行動を妨げる「官」であったことがうかがわれる。」（『秩父事件における農民の秩序意識・権力観』『秩父事件研究顕彰』秩父事件研究顕彰協議会、一九九九年、六一頁）としている。また稲田雅洋氏は「国家権力との闘いとなったが故」に鉄砲・刀・槍が使用されたと分析しているが、これも武器そのものの分析を伴ったものではなく、その証言から考察しているのみである（『近代社会成立期の民衆運動―困民党研究序説―』筑摩書房、一九九〇年、二二六頁）。
- (8) 註(5) 藪田論文、参照。
- (9) 註(1)に同じ、一七三頁。
- (10) 註(3)に同じ。
- (11) 三一―三二九。
- (12) 六一―八五。
- (13) 一一七―一五。
- (14) 六一―四九。
- (15) 二一五―四。

- (16) 三一六三。
- (17) 二一三四五。
- (18) 二一三六〇。
- (19) 重禁錮の判決を受けた埼玉県参加者の二名中、竹槍のみを携行していた幹部以外の者は以下の六名である。根岸彦三郎(三沢村、衣類略奪し六ヶ月)、内田鹿蔵(寺尾村、羽織一枚を略奪し八ヶ月)、新井清作(上吉田村、衣類略奪し三ヶ月)、清水与助(石間村、一〇円窃盗で八ヶ月)、小林小平(上日野沢村、二五銭窃盗で六ヶ月)、山崎幸三郎(塚崎村、綿入三、半纏一、帯一を略奪し六ヶ月)。また長野県においては、棒のみの携行にもかかわらず、打ち壊し、略奪を行ったため重禁錮に処せられた大日向村の六名(市川清作、大塚徳松、大塚与平、平岡子之作、武者九内、由井万之助)がいる。鎮台兵との交戦を行いながら罰金刑となったものとして長野県北相木村の以下の一四名の者がいる(井出馬平、井出勘四郎、井出末吉、井出竹治郎、井出伴蔵、菊池繁蔵、菊池小市、坂本浦治郎、坂本京弥、高見沢玉吉、新津浜吉、山口岸太郎、山口筆五郎、山下丑太郎)。また、鎮台兵との激戦のあった金屋での戦闘への参加者でも、一六名の罰金刑者がいる(鈴木綱五郎・三沢村、金子多四郎・皆野村、新井小四郎・金尾村、花輪辰五郎・同上、吉田元次郎・伊豆沢村、黒田富五郎・河原沢村、柳原喜平次・日尾村、高野作太郎・下吉田村、横田多四郎・金崎村、新井忠平・下日野沢村、野口松五郎・本
- 野上村、笠原今朝吉・藤谷淵村、小宮山国吉・同上、村田卯太郎・同上、柳亀蔵・同上、杉田藤三郎・甘粕村)。
- (20) 「武州寄居大騒動日記」(『新編埼玉県史』資料編一一、埼玉県、一九八一年所収) 八四六、八四七頁。
- (21) 同右。
- (22) 「明治二年九月 岩鼻県大谷村一件始末書」、註(20)に同じ、九五八頁。
- (23) 吉田町教育委員会編『吉田町史史料篇』(一九七六年) 第一輯、二八七頁。
- (24) 同右、二九二頁。
- (25) 同右、二八五頁。
- (26) 「木公堂日記」(両神村図書館所蔵。同史料は、秩父郡薄村(現、両神村)の農民、柴崎谷蔵が慶応三年から明治三四年まで書き綴った日記である。両神村の有形文化財に指定されている)。
- (27) 土屋喬雄・小野道雄編『明治初年農民騒擾録』(勁草書房、一九五三年) 四一頁。なお、史料中にみえる万能とは、除草用の鍬の名称である(『世界大百科事典』平凡社、一九八八年、第二七巻、二七二頁)。
- (28) 安藤優一郎「百姓一揆における鉄砲相互不使用原則の崩壊」(『歴史学研究』七二三号、一九九八年八月号所収) 参照。
- (29) 註(5) 保坂論文、七五〜七六頁。
- (30) 註(27) に同じ、三七頁。

- (31) 一七九五。
- (32) 二二二二。
- (33) 四一五八九。
- (34) 二一三四五。
- (35) 一四一八、一四二六。
- (36) 幹部の中に弾薬方として阿熊村の守岩次郎吉、三品村の門松庄右衛門がいる。また、弾薬運搬を行ったことが尋問調書・裁判言渡書に記されている者は、以下の七名である。大宮郷・明石宮吉、井戸村・持田清太郎、三山村・島田吉五郎、伊古田村・小林西蔵、三品村・門松庄右衛門、群馬県魚尾村・桜井多古平、同神ヶ原村・赤松光吉。
- (37) 一〇月一四日に田代栄助、新井周三郎、柿崎義藤、坂本宗作、宮川寅五郎、新井甚作、堀口幸助、女部田梅吉、柴岡熊吉、大野茂吉の一〇名で、横瀬村の富田源之助方より現金八〇円と刀、槍等一五点、柳儀作方で現金一〇円と刀剣等五点を奪っている(柿崎義藤裁判言渡書・二一三三、田代栄助裁判言渡書・一五三三より)。